

に覆盆子畑を付けさせられ、御城より見渡す爲に、宮腰道を直道に作らせらるゝよし記載す。泉野なる櫻畠の櫻木も、若しくは此の時植ゑしめられたるならん。犀川欠の上野は、則ち今いふ櫻畠の地をいへり。改作所舊記に載せたる元祿十三年十月里長の言上書に、石川郡泉野村領之内に、先年もつく畑と稱し、木櫛並に櫻・椿等植有之畑御座候處、三十年許以前に右植木共御城中へ被爲移、其外御家中へも被下、すきと空地に成。只今右畑地步數千二百三歩程杉植有之。又泉野出村領之内に椿花壇と稱し、御畠一々所有之處、寛文七年に新開被仰付とあり。按ずるに、元祿十三年より三十年許以前は、寛文の中頃にして、利常卿薨逝後なり。思ふに、櫻畠および櫻木の元組地は、小松城附の輕卒共にて、萬治元年十月利常卿小松城に薨逝し給ふにより、翌二年小松附の諸士悉く金澤へ歸郷を命ぜらるゝに依りて、輕卒共も金澤へ歸り、泉野なる櫻畠の地を組地となし、邸宅を爰に賜ふにより、此の時櫻木をば悉く伐採して、邸地となしたるゆゑ、此の組地をば櫻畠の組とは呼ばしなしたるなるべし。菅家見聞書集(三)に載せたる寛文三年六

月の令文に、犀川櫻畠とあり。

○櫻畠古傳話

寛文十二年に筆記せし箕浦高良の自記に云ふ。往昔柴田修理へ、信長公より越前一國並に加賀國石川郡等二十萬石を被下、金澤城に甥佐久間玄蕃を置き、加州の一揆頭共を悉く討殺せり。其の比一揆共蜂起し、泉野六道林の堤、櫻畠の下なる河原にて大勢討殺したり。其の靈魂或は高尾の坊主火と成り、或は河原にておがう・兵藏・久藏など呼ぶ聲夥し云々と。今按ずるに、右は寛文頃まで聞傳へたる古老の傳説をば、其の儘載せたるものなり。柴田修理勝家越前一國を賜はり、加賀の一揆共を征伐せんとて出馬せしは、度々なりしかど、金澤の尾山城に佐久間玄蕃盛政を置き、一揆頭の者共を討殺し、國內を平定せしは天正八年の事なるべし。櫻畠の下河原といふは、今云ふ吹屋坂の下、小橋邊なる犀川の河原をいふなるべし。おがう・兵藏・久藏は、其の頃討殺したる一揆の魁首共なるべく、寛文の頃までは尙さる怪異ありしと聞ゆ。高尾の坊主火とて、高尾山の邊より陰火出づる事は、今の世までも尙ありといへども、櫻畠

の下河原の怪異は既に絶えたりけん。

○櫻畠組地

舊藩中は、櫻畠の組とて、輕卒の組地なりしかど、明治廢藩後追々退去して、今は多く畠地となりたり。舊傳に云ふ。此の地および櫻木の組地は、往昔中納言利常卿小松に在城し給ふ頃小松附の輕卒共にて、萬治元年に利常卿薨去し給ふに依りて、翌二年悉く金澤へ歸り、櫻畠および今いふ櫻木の地と兩地に於て組地を賜はりたり。そのかみ今櫻木と呼べる地も櫻畠と稱し、野田寺町の往來を挟みたるのみにて、一緒の畠地なりしを、此の時組地と成りて邸地に賜はりけり。依りて今いふ櫻畠の地は、犀川の河岸なるにより、櫻畠河方組と稱し、今いふ櫻木の地は、山の方なるに依つて、櫻畠山方組と稱せり。其の以前は河方の組地は、河岸に今一町ありしかど、河崩にて河中と成りたりとぞ。又右輕卒共、小松にて諏訪明神を信仰せし故に、櫻畠に組地を賜はるに付き、櫻畠の近邊に諏訪明神を勧請し、社祠を造營して土地神となしたり。是野田寺町なる諏訪神社にて、今に至り櫻木・櫻畠兩地とも元組地の分は、悉く諏訪神社の

氏子なりといへり。

○櫻畠角場跡

菅家見聞集に、寛文三年六月三日、犀川櫻畠之下がけ、淺野川觀音山之下、夏之内御家中之諸士鐵炮稽古所に被定。依之居屋敷之外於所々鐵炮打儀被停止とあり。按ずるに、萬治元年十二月の定書に、金澤侍屋敷に而鐵炮打候事御停止候。卯辰山・犀川・淺野川之岸三ヶ所に而廣き的場を立置、稽古仕度者は年中不依何時、爲打可申とあり。此の命令に依つて、寛文三年の命令ありたるなるべし。延寶の金澤圖に、この的場二十間に三十間とあり。

○石 伐 町

延寶の金澤圖に、二十人石切九人、片側は同十一人とありて、そのかみ舊藩の二十人石工の組地なり。此の石工は人數二十人居たるゆゑに、二十人石切と呼べり。故に此の地をば石伐町と呼べりとぞ。今は櫻畠に屬せり。延寶の圖は次に載せたる如し。

○吹 屋 坂

一名石伐坂、俗に清立寺の坂と呼べり。三州名跡誌に云ふ。